

主 題：偽教師への神のさばき①

聖書箇所：ペテロの手紙第二 2章4－8節

どうぞⅡペテロ2：4のみことばをお開きください。

偽りの教師たちは神のみことばの真理に反することを教え、人々が真理の道から外れるようにと、惑わし続けるサタンの使いたちであり、教会はそういった人々の影響を受けていました。偽りの教師たちが入り込んできて、真理を惑わしていた。そこでペテロは、いま一度彼らに真理を思い起こさせて、その真理に立ち続けるようにと教え導こうとするのです。偽りの教師たちは教会の中に入り込んで来て、人々の関心を集めていたかもしれませんが、ひょっとすると彼らはとても魅力的で人々を引きつけるカリスマ性を持っていたかもしれない。またとても知恵があって、人々の尊敬を勝ち取っていたかもしれませんが、しかし、たとえそのような人たちであったとしても、みことばが明らかに教えていることは、真理に逆らうならば必ず神様からの報いが伴うということです。偽りの教えを持ち込んで人々を惑わしている偽りの教師たちには必ず神からの審判が、さばきが下るということをペテロはいま一度この読者たちに教えようとするのです。というのは、確かに今彼らはそこでうまくやっているように見えるかもしれないけれども、必ず神様の審判が下るからそれに信頼を置きなさい、神様は彼らを放って置かれることはない、必ずさばかれる、そこに希望を持ちなさいとペテロは教えているかのようです。

彼らが必ずさばかれるということを三つの史実、歴史的事実を挙げてペテロは教えようとします。これまでの歴史にあって、実際に起こった神様からの三つの審判、神のさばきを挙げて、この偽りの教師たちに対するさばきの日が必ず来ることを教えようとするのです。一つ目は罪を犯した天使たちに対するさばきです。二つ目は罪深い全世界へのさばき、皆さんよくご存じの大洪水によるノアの箱舟による神様のさばきです。三つ目が罪深い町ソドムとゴモラへの神様のさばきの話、ペテロはここで挙げるのです。この実際に起こった歴史上の事実を挙げることによって、さばきの確実性を明らかにしようとするのです。それを順番に見ていきましょう。

A. 天使へのさばき 4節

まず天使たちへのさばきが4節に出てきます。「神は、罪を犯した御使いたちを、容赦せず、地獄に引き渡し、さばきの時まで暗やみの穴の中に閉じ込めてしまわれました。」と教えています。実はここは、原語では「もし」と訳せる接続詞でもって始まっています。「もし」ということばは「もしかすると」とか「仮定」の意味でも使いますが、ここでは「もし～ならば」、条件を語るために使っています。つまりもし神がこれらのさばきを与えられたのなら、さばきは必ず起こると。そして神が実際にさばきを与えられたのだから、必ずこのさばきの日が来るのだということをペテロは教えています。

1. さばきの確実性 ガラテヤ6：7－8

まず、最初に彼は、さばきの確実性を明らかにしています。「神は、罪を犯した御使いたち」、つまり天使たちをと書いてあります。そして彼らに対して最初に出てくることばが「容赦せず」です。つまり神様は、あの天使たちでさえも罪を犯した時には、それを見て見ぬふりをするお方ではないということです。神様は天使でさえもさばきを下すのだと言っています。私たちが覚えなければいけないのは、神は余りにもきよい正しいお方であって、どんな罪に対しても必ずさばきを下すということです、パウロがガラテヤ人への手紙の6：7で、「神は侮られるような方ではありません。人は種を蒔けば、その刈り取りもすることになります。」と言います。自分で種を蒔けば必ずその刈り取りもする、罪を犯せば必ずその結果は自分に返ってくるという話です。ですから罪を犯したのがたとえ天使であったとしても、彼らに神様のさばきは下ると言うのです。

私たちがコロサイ教会のことを学んだ時に、コロサイ教会の中に入り込んできた偽りの教師たちが持ち込んだ異端が天使を崇拝することでした。主イエス・キリストの贖いのみわざ、救いのみわざをただ信じるだけでは不十分であって、仲介者である天使を受け入れなければならないという天使崇拝というものを偽りの教師は教会の中に持ち込んできたのです。確かに天使というのは力があるし、知恵がある存在です。崇拝の対象となっていた天使たち。このペテロの手紙の読者たちもそういうことを知っていたかもしれない。そこでペテロはたとえそれが天使であったとしても、神は正しいお方であって、罪を必ずおさばきになるということを強調しているかのようにも見えます。

2. さばきの詳細

1) 「地獄」

さて、この天使に対するさばきを見ると、「地獄に引き渡し」ということばが次に出てきています。確

かに「地獄に引き渡し」と書くと長いことばですが、実はこれはギリシャ語では「タータローサス」という一言だけです。そのことばが「地獄に引き渡し」というふうに日本語で訳せるわけです。この「タータローサス」ということばは「タータルス」ということばに由来しています。新約聖書の中にはこのことばはここにしか出てきていません。では一体この「タータルス」ということばはどういう意味なのかと言うと、パークレーが非常にわかりやすい説明を加えています。「このことばは全くヘブリス的概念ではなく、ギリシャ的概念である。ギリシャ神話では、『タータルス』は最も低い地獄である。天が地よりはるかに高いように『タータルス』はハデスよりもはるか下にある。特に人間の父であるゼウスに反抗した神々、タイタンや巨人たちが投げ込まれた場所であった。『タータルス』は最も低く、最も恐ろしい地獄である。そこには神の力に反抗した者が永遠の刑罰として閉じ込められている」と。ペテロはこういうギリシャ神話に出てくることばをあえて使ったのです。恐らく皆さんが地獄ということばを聞いた時にすぐ連想することばはゲヘナだと思います。ヒノムの谷と呼ばれて、いつもそこで火がくすぶっていたゆえに地獄を表すことばとして使われています。

ではなぜペテロはここでゲヘナではなく「タータルス」ということばを使ったのかというと、その当時の人々が良く使ったギリシャ語をあえて使ってこのメッセージを明確に伝えようとしたのです。ゲヘナでもわかったと思うのですが、この「タータルス」というより一般的に使われていたことばを使って、あの天使でさえも罪を犯した場合、神はさばきをお下しになるのだということ教えようとしたのです。

2) 「地獄・タータルス」の説明：

さて、ペテロはどんな場所なのかまで記してくれています。

(1) 「暗やみ」

見ていただくと、その説明の中で最初に「暗やみの」ということばが出てきています。この「タータルス」というところは「暗やみの」のところであると。なぜこんなことばが使われているかということ、私たちは神は光であって暗い所が一つもないということを知っています。つまりこの場所は神様から永遠に引き離されてしまった場所であると。

(2) 「穴の中に」

そしてそこは「穴の中」とあります。「穴の中」と訳されていますが、実は英語の聖書を見ると、「穴」と「鎖」、両方の訳があります。というのはどちらでも取れるからです。ですからこれが「穴」なのか、「鎖」なのか、結論を見出してはいないのですが、しかし言っているのはどちらも同じです。全く光のない暗い「穴の中」で捕らわれている状態、もしくはこれが「鎖」であるとすると、「暗やみ」自身がまさに「鎖」のようにそこに捕らわれている人を捕らえている状態を比喩的に表している。どちらにしても、この罪を犯した天使たちが送られた「タータルス」というところは「暗やみ」の場所であり、そしてそこから彼らは逃れることができないと。

(3) 「閉じ込めてしまわれました」

次のことばを見ると、「閉じ込めてしまわれました」と書いてあります。実は日本語では訳されていないのですが、原語にはここに「投げ入れる」ということばが加えられています。そこに投げ入れて閉じ込めてしまったということです。「閉じ込め」られたということばは、「そこに何かを保留する」とか、「その中にあるものが外に出てこないようにする」という意味です。

結論：

まとめると、罪を犯した天使たちは神によって「タータルス」——地獄に送られた。まさにそれは暗やみで、彼らはそこから外に出てくることができない、そういう状態に今置かれているということをペテロが教えます。今そこに置かれているとあえて言ったのは、「さばきの時まで」と書いてあるからです。彼らは「さばきの時」にいま一度出てきて、さばかれて永遠の地獄に至るということです。神は罪を犯した天使たちを地獄に投げ入れ、予定されているさばきまでその暗やみの穴に彼らを閉じ込めた、收容したということです。

そのことがこの4節にも出てくるのですが、皆さん今の説明を聞いていて少し疑問に思われませんでしたか？というのには罪を犯した天使たちは地獄に行きました。もし地獄に行き込んで閉じ込められているのなら、悪霊たちは今は全く働きをなせないということになります。でも今私たちの時代にあって悪霊たちは十分な働きをしています。パウロは私たちの戦いは血肉に対するものではなくて、霊に対するものだと言いました。あえてそう言ったのは今私たちが住んでいるこの時代にあって、もちろんこれまでもそうですが、信仰者の戦いは悪霊たちに対するものです。ですから皆さんもよくおわかりのように、そういうさまざまな誘惑やその影響を受けたこの世の中にあって、私たちはこの世との戦いを強いられるのです。つまり確かに4節を見ると、すべての悪霊が、罪を犯した天使たちが閉じ込められているように記されていないながら、実際に今も働きをなしている悪霊たちがいるということは、実は閉じ込められている悪霊と閉じ込められていない悪霊が存在するということです。最初の被造物の罪は何だったか覚え

ておられますか？サタンが最初の罪を犯すわけです。イザヤ14章やエゼキエル28章に出てきます。神によって造られていながら神になろうとするのです。神と同じ賞賛を受け、礼拝を受けようとするのです。その時に、サタンに伴って神に逆らった無数の天使たちがいます。ここで言われている閉じ込められている天使たちというのは、その天使たちのことではありません。罪を犯した天使たちのことを悪霊と呼びますが、その後、その中でまた特別な罪を犯した悪霊たちの話をこの箇所がしているのです。

I ペテロ3：19を開いてください。「その霊において、キリストは捕われの霊たちのところに行ってみことばを宣べられたのです。」とあります。ですから捕らわれている悪霊たちがいるという話です。これは以前学びましたが、「みことばを宣べ」伝えたというのは福音を語ったのではなく、勝利の宣言をなされたという話です。ですからこの箇所が言っていることは、明らかに捕らわれた霊が存在しているということです。

そしてユダ6節には「また、主は、自分の領域を守らず、自分のおるべき所を捨てた御使いたちを、大いなる日のさばきのために、永遠の束縛をもって、暗やみの下に閉じ込められました。」と書いてあります。「自分のおるべき所を捨てた御使いたち」がいるのです。しかも「永遠の束縛をもって、暗やみの下に閉じ込められました」、今我々が見たIIペテロの所と非常に類似しています。この罪を犯した悪霊たちが、また改めて大変大きな罪を犯したのですが、どんな罪だったのかが記されているのが創世記6章です。そこには悪霊たちが犯したある罪のことが記されています。「さて、人が地上にふえ始め、彼らに娘たちが生まれたとき、神の子らは、人の娘たちが、いかにも美しいのを見て、その中から好きな者を選んで、自分たちの妻とした。」と。この「神の子ら」と記されているのは天使たちです。天使たちが人間の娘たちの「美しいのを見て」自分の好きな者を選んで自分の「妻とした」と。天使は体を持っていませんから、こういったことはできません。だから人間の男たちの体を支配してこのようなことをなしたわけです。先ほどユダの中に「自分の領域を守らず、自分のおるべき所を捨てた御使いたちを」とあったように、この行為は神のみこころに反するものだったのです。天使が人間の体を支配して人間の女性たちと性的な罪を犯した。その罪のことをペテロは私たちに教えてくれているのです。

ですから、サタンが罪を犯した時に多くの天使たちが同じように罪を犯したと。そして罪を犯した悪霊たちの中で、今見てきたような罪を犯した者たちがいるのです。この者たちが捕らえられているということです。そして彼らに対して必ず神のさばきが下ることを教えます。きょうのテキストに戻って、まず4節でペテロは、この罪を犯した天使たちに対して神様のさばきが下ったという事実が、偽りの教師たちにも必ずさばきが下ることを教えていると説明しています。

B. 罪深い全世界へのさばき（大洪水によるさばき） 5節

1. さばきの確実性

二つ目に彼が挙げているのは罪深い全世界に対するさばきです。「また、昔の世界を赦さず、義を宣べ伝えたノアたち八人の者を保護し、不敬虔な世界に洪水を起こされました。」と5節に記されています。「昔の世界を赦さず」の「赦さず」ということばと4節の「容赦せず」ということばは同じギリシャ語が使われています。同じ意味です。罪を犯した天使たちを神様は赦さなかった。同じように罪を犯し、神に逆らった昔の世界の人々を神は赦すことをしなかった。さばきを下されたということです。どんなさばきだったかということ、ここに書かれているように、「世界に洪水を起こされました」とあります。一体だれがそれによって滅びたのか、だれがさばかれたのか。「不敬虔な」と書かれています。神を敬うこともしない、創造主なる神を礼拝することもしない。またその神を恐れることもしない。そのような人々に対して神のさばきが下ったと。

ちょうどノアの時代に関して先ほども触れた創世記6章の中ではその当時の様子をモーセがこんなふうに記しています。5節「主は、地上に人の悪が増大し、その心に計ることがみな、いつも悪いことだけに傾くのをご覧になった。」、11-12節「地は、神の前に墮落し、地は、暴虐で満ちていた。神が地をご覧になると、実に、それは、墮落していた。すべての肉なるものが、地上でその道を乱していたからである。」と。人々が考えることは神を喜ばせることではなくて、神が忌み嫌われることを人間はいつも考えていた、そういう選択をしていたと。またこの当時が「暴虐で満ちていた」というわけですから、非常に残虐であったり、いろんな争いがあったのでしょう。また彼らが「地上でその道を乱していた」、彼らの生き方が神の前に全く墮落したもの、腐敗したものであったと。神よりも罪を愛し、神よりも快樂を愛し、生きていたそういう社会であったと。まさに神様を人生から排斥した、退けた生き方そのものです。悲しいことにこの世界はまさにそういう生き方をする人々にあふれています。神を捨てることによって何が起こるかということ、道徳的に墮落して行くのです。自分の快樂をどうやって生み出すのか、そういうことしか考えない人たちが出てきた時に大変な世界になることはもう言うまでもありません。まさにパウロが新約聖書の中で言ったように、「彼らは、神を知っていながら、その神を神としてあがめず、感謝もせず、かえってその思いはむなしくなり、その無知な心は暗くなったからです。」、ローマ1：21で言うように、まさ

にそういう社会があつたノアの時代にも存在していたということです。そしてパウロの時代にも存在していた。また今の時代にも存在していることは明らかです。

結局、人間は創造主なる神様に従いたくないのです。自分の人生だと言って、自分の思いどおりに生きていきたいと。そんな願いをいただいている心はますます神のみこころに反する生き方を助長させるものです。パウロはダビデのみことばを引用してローマ3：18でこう言っています。「彼らの目の前には、神に対する恐れがない。」と。そこに一番大きな問題があるのです。神を恐れなくなりました。私たちが人を恐れなくても生き方は変わってきます。恐れるものが存在しない人は好き勝手に生きるのです。でも少なくとも我々も幼いころから恐れる対象として神のことを教えられてきました。私も未信者の家庭に生まれ育ちましたが、神社やお寺の前を通る時は行動に注意するようにと、そこには恐れるべき存在がいると教えられました。だから自分の行動に注意を払いました。ところがいつの間にかそういう思いもなくなってきた。そうすると自分の思い通りに生きようとする。人間の根本的な問題はここにあります。創造主なる神を恐れていない。あなたの罪をすべて知っている神はあなたの罪を必ずさばくと警告されているのです。それでも私たちはそんなのどうでもいい、自分の人生だから好きに生きていきますと。残念ながら人間は神に対する恐れを失ってしまい、その結果、自分の思い通りに生きるという生活を行い続けてしまったと。

ペテロが教えることは、あのノアの洪水が起こった時のことを思い出してみなさいと。なぜ洪水をもって全世界が滅んだのか、人々が滅んだのかと。それは彼らが神を忘れ、神に背き、自分の快樂のままに生きていたからです。その罪に対して神様はさばきを下されたのだと。気をつけていなさいと。必ずさばきが来るからと。あのにせ教師たちがどんなにうまくやっていると、必ず神の前に立つ日が来るのだと。そして神は必ず彼らにふさわしいさばきを下されると。

2. 恵みの存在：「ノアの家族の救い」

そのさばきの現実をペテロは教えるのですが、続けて5節を見ると、同時に恵みの話をします。「また、昔の世界を救さず、義を宣べ伝えたノアたち八人の者を保護し、不敬虔な世界に洪水を起こされました。」と。ペテロはここで確かに全世界的なさばきが下ったけれども、神はノアの家族を守られたと。不敬虔な世にあって神はノアを愛して彼らを守られたと。なぜ神様は彼らにそういった恵みを施したのかということ、それはノア自身が神を愛し、神を敬う存在だからです。神様に対してノア自身は非常に忠実で従順でした。神がノアに命じたことは、箱舟を造れということでした。実際に今アメリカのケンタッキー州に実物大のノアの箱舟があります。私も行って見ましたけれども、皆さんが創造するものを遥かに超えたものです。思うのはなぜこんなものを造ることができたのかです。中に入って見て驚くのは、どうやって家畜にえさを与えるのか、その排泄物をどうやって処理するのか、どうやって太陽の光を取り込んで光合成を行わせるのか、すべてのことにおいて考えられないような知恵がそこにあります。神がそうしてノアに知恵を与えてこの箱舟を完成させた。私が見た時に思ったことは、もしこんなもの言われたら到底できっこないなと。でも神がその命令を与えた時、ノアはそれに従いました。そうして従順に従ったという行動が彼を救って彼を義人としたのではなくて、彼が義人だったから、その義人であるということが正しい行動、神への従順によって証明されたということです。

ここに「義を宣べ伝えたノア」と書いてあります。恐らくノアが大きな船を作っている様子を見た時に、いろいろな人たちがやって来て、「何をしているの?」、間違いなくそういう質問をしたはずですが。するとノアは、神が雨を降らせて洪水をもたらし、人類を滅ぼすから箱舟を作っていると答えます。その話を聞いて人々はどう思ったのか――。その時まで彼らは雨を見たこともないし、経験したこともないのです。このノアの話聞いた時、みんなあざわらったでしょう。でも少なくとも人々は関心を持ってノアに質問したはずですし、ノアはそのたびに罪に対する神の審判が下るのだ、神が約束されたように必ず洪水をもってすべての者たちを滅ぼしてしまうというメッセージを宣べ伝えることになったでしょう。そうしてノアは罪人にその罪を悔い改めてこの救いにあずかるようにと、何度も何度も語ったでしょう。でも、人々はそれを聞くことがなかった。この救いにあずかった者たち、ノアの箱舟に入ったのはわずか8人しかいなかった。ノアとその妻と三人の息子たちとその妻たちの8人でした。語っても語っても、120年間語っても人々は悔い改めなかった。私たちの伝道に似ていませんか?何年語っても人々は心を開かない。

今回の旅行の初めに私はシンガポールにいました。月曜日の夜に着いて翌日の火曜日にシンガポールの宣教団体の責任者と日本語の放送を担当している責任者と三人で話し合いをしていました。その宣教団体の責任者はシンガポールの中国人の方です。そして日本語放送の担当の責任者は韓国の日本で働いていた牧師です。そして私と。いみじくもその中国の責任者が言うのです。私は中国人です、彼は韓国人です、そしてあなたは日本人です。韓国はたくさんのクリスチャンがいてたくさんの宣教師が送り出されています。今中国も1億に近いクリスチャンがいて世界じゅうに彼らの国から宣教師が送り出され

ています。でも日本は全然変わっていないと。毎年バプテスマを受ける同じ数だけ教会から離れていきます。一体この国はどうなってしまっているのかと。私たちがいろいろな機会を用いて、祈りをもって福音のメッセージを語っても、このメッセージを聞いて心から悔い改めてイエス・キリストを信じる人が少ないことは現実です。

ノアの時代もそうだったのです。一生懸命神様の真理を語っても、救いがあることを語っても、さばきがあることを語っても、人々はそれに対して心を開かなかつた。私たちはくじけてはならないのです。めげてはならない。なぜなら神様は私たちに人を救えと命じたのではなくて、福音を語れと命じてくださった。人を救えという命令をいただいたとしたら、そんなことできっこありません。私たちに与えられたメッセージは福音を語れと。救いがあることを語りなさい。救い主がおられることを語りなさいと。罪のさばきがあることを語りなさいと。そのメッセージを語るようにと神は私たちに救ってくださり、私たちが生かしてくださった。このノアの様子を見る時に少し励まされませんか？結果はすべて神の御手のうちにあります。私たちは自分に与えられた責任をしっかりと果たすのです。ノアは箱舟を作れと命令を受けて、その命令をしっかりと守り通しました。もし私たちがこの地上にあって、ノアとその子どもたちのように忠実に生き続けるならば、その歩みというのは決して人生をむだにする歩みではありません。サタンはそう言うかもしれない。神様に従ってばかりで人生をむだにしていると、もっと楽しめると、もっと喜びがほかにあると。でもこの神に従うという歩みのそういう人生は決して神の前にむだではなかつた。そのように歩む者たち、日常にあって本物の満足をもたらし、そして永遠の祝福をもたらすものだ。

しかも、ここにあるように、「義を宣べ伝えたノアたち八人の者を保護」したとあります。だれが彼らを守ったのかです。自分たちではないでしょう？神が守ったのでしょうか？あなたのこともちゃんと神様は守ってくださる。私たちは、この歴史から学ぶことが山ほどあります。神がどんな方であるか、我々はこうして学ぶことができる。ノアたちをちゃんと守ったのです。神を愛し、神を信じ、この救いにあずかっている者たちを神は決して見捨てることがないのです。

C. 罪深い町へのさばき（ソドムとゴモラへのさばき） 6-8節

1. さばきの確実性 6節

1) ソドムとゴモラへのさばき

三番目は6節の所から罪深い町ソドムとゴモラへのさばきの話です。6節「また、ソドムとゴモラの町を破滅に定めて灰にし、以後の不敬虔な者へのみせしめとされました。」、ここでもペテロは裁きの確実性を話しています。ソドムとゴモラに対する神のさばき。この「破滅に定めて」の「定め」という動詞は「～に有罪の判決を出す」とか「宣告する」とか、「間違った行動などに対してそれを非難する」とか、「それを責める」とか「とがめる」という意味です。ですからソドムとゴモラの町に対して神は破滅の宣告をなされたのです。そしてその結果、この町が灰になったとこの箇所が教えています。なぜ神様が破滅の宣告をなされたのか——。言うまでもありません、彼らの不敬虔さ、彼らの罪です。

2) さばきの目的

でもこのさばきには目的があったことが書いてあります。「以後の不敬虔な者へのみせしめとされました」と。その後の人々のための模範であったと言うのです。この「みせしめ」ということばは警告のためのみせしめです。しかもこの「されました」という動詞は完了形で書いてあります。ですからそのソドムとゴモラのその時から神はずっとこの出来事を通して人々に警告を与え続けておられる。罪を犯せば必ずその罪に対する神のさばきがあると。だから赦しがあるうちに赦しを求めて出てくるようにと。その警告を神はずっと発し続けておられるのです。そのことを我々はここで見て取ることができます。彼らの罪ゆえにソドムとゴモラが滅ぼされた。だから目を覚ましなさい、赦しがあるうちに罪を悔い改めてこの救いを受け入れなさいと神は警告を与え続けてくださる。

2. 恵みの存在：「ロトの救い」 7節

続けて7節を見ると、ここにも恵みの存在が記されています。ロトの救いの話です。「また、無節操な者たちの好色なふるまいによって悩まされていた義人ロトを救い出されました。」とあります。あのロトのことをペテロは「義人」と呼んでいます。皆さんは本当にそう呼ぶに値する人物かと思うかもしれない。でも確かに彼は「義人」、つまり救いにあずかっていたのです。そう言える理由がここに書いてあります。

1) 「無節操な者たちの好色なふるまいに悩まされていた」から 創世記19:5

「無節操な者たちの好色なふるまい」によってロトは「悩まされていた」とペテロは言うのです。この「無節操な者たちの好色なふるまい」の「無節操」というのは、「道徳的に赦されない」とか、「道徳的に悪いこと」を指しています。「好色なふるまい」というのは「みだらな」、「不品行」、「不道徳」の話です。そういう生活をしていただけと言うのです。もっと正確に見るためには、実際にその時の記述を見ると、創世記19章で二人の天使たちがこの町を訪問した時にロトは彼らを歓迎し、家に二人を迎え入れるの

ですが、その時にロトの家の周りは人々によって囲まれてしまって、その人々がロトに対して5節「ロトに向かって叫んで言った。『今夜おまえのところにやって来た男たちはどこにいるのか。ここに連れ出せ。彼らをよく知りたいのだ。』」と。「よく知りたい」とありますが、出身や家族のことについて聞きたいのか、どんな質問を持っていたのかという話ではないのです。これは性的に彼らのことを知りたいということです。つまりこの家を囲んでいた人々は同性愛者だったのです。彼らが求めたのはこの町を訪れた二人の体だったのです。これほどこの町は不道德な町だったのです。そして、今見てきたように、神はこの町に対して大変厳しいさばきを下しておられます。

2) 正しい行い

7節にはロトはそのような「ふるまいによって悩まされていた」と書いてあります。8節を見ると、「というのは、この義人は、彼らの間に住んでいましたが、不法な行ないを見聞きして、日々その正しい心を痛めていたからです。」、その現実を見てロトは大変心を痛めていた、悲しんでいたと。それはロトの中に神の前に正しいことを行っていきたいという思いがあったからです。また同時にロトという人物を見た時に、先ほどもお話ししたように、この天使たちが訪問する時にロトは彼らを歓迎しています。また同時に天使たちが今この町から逃れなさい、神の審判が下るのだと言った時にロトはそれに従っています。ですから確かに霊的な人物だったのかどうかという定義から言うならば、弱いところがたくさん見える人物だったかもしれない。しかしそれでいて彼はこうして正しい行いをもって彼が救いにあずかっている人物だということを明らかにしていたのです。そこで、このロトに対して神様が何をなさったかというところ、「義人ロトを救い出され」と7節にあります。

英語の聖書の中には8節は括弧でくくっているものがあります。それは8節は7節の補足説明だからです。今見てきたように、一体何がそこで行われていたのか、ロトがどういう思いを持っていたのかが記されています。

またここで皆さんに見ていただきたいのは、「義人ロトを救い出され」たのはだれであったのかです。神です。彼らは大変な町の中にいたのです。でも神はちゃんと彼らを守ってくださり、そのさばきの時に神は彼らを救い出してくださった。神のみわざであるということを強調するわけです。

三つの出来事を実際に見てきたのですが、最初は天使に対するさばきでした。二つ目は全世界に対するさばきで、そこに神を信じていたノアとその家族の救いが書かれていました。三つ目はソドムとゴモラに対する神のさばきとともにそこにいた神を信じていたロトとその家族の救いが書かれていました。確かに神のさばきが約束され、神のさばきは必ず下るのですが、神を信じる者には必ず救いが与えられ、神がその人たちを守り救ってくださると。ノアが救われ、ロトが救われたと。でもおもしろいのは天使たちは救われないのです。この救いは私たち人間のためだけに備えられたものです。イエス様は天使たちの罪のために死なれたのではない。我々人間のために、あなたのために死んでくださった。さばきがあると警告はします。同時に救いもあるとみことばは約束を与えます。

感謝ではないですか？ 私たちはその救いにあずかったのです。この地上にいても神が我々をちゃんと守ってくださるし、そしてその神は私たちを見放すことなく永遠の祝福へと招いてくださる。そして我々はそこで神とともに永遠を過ごすのです。先に天に上がった愛する者たちとの再会が約束されています。この間もある人と話をしている、我々クリスチャンの幸いというのは先に天に上がった信仰の先輩たちとそこで再会できるということです。皆さんだれと再会することを楽しみにしています？ 友人かもしれないし、親かもしれない。私も自分の親と再会できるのを楽しみにしています。それ以上に私たちの救い主にお会いすることができる。我々を救ってくださったその救い主に。

我々はそのことを大いに喜んでいますが、この祝福にあずかっていない人たちが私たちの周りにあふれています。このテキストが私たちに警告していることは、さばきは現実です。必ずさばきが来るという話です。それを知った私たちは、まだまだやらなければいけない務めが残っています。先ほど見てきたように、結果はともあれ私たちの務めはこのすばらしい救いを宣べ伝え続けていくことです。神の助けがそこにはあります。その助けをいただきながら、この新しい週もこの救いを宣べ伝え続けていくことです。そして願わくば、私たちの愛するすべての者が同じようにこの救いにあずかって天で再会できるという希望を持って生きることができるよう、そのように変えられることを期待しながら、私たちのなすべきことを忠実になしていくことです。さばきは来ます。にせ教師たちに対するさばきは必ずあります。それは歴史が証明しています。どうぞこのペテロのメッセージをしっかりと覚えて、この一週間なすべき働きをしっかりと行なっていきましょう。

《考えましょう》

1. ペテロがさばきの3実例を挙げた理由を教えてください。
2. どうして神は愛のお方でありながら、罪人をさばかれるのでしょうか？

3. 9節でペテロが教えた真理をあなたのことばで説明してください。
4. きょう主はあなたにどのようなチャレンジを与えてくださいましたか？信仰の友と分かち合ってそのチャレンジにこたえてください。